

太田誠監督勇退に想う - 球心いまだ掴めず -

経済学部教授 石川純治

一

駒澤太田野球の神髓

ここに太田野球の神髓が書かれている一冊の本がある。太田(前)監督自身の筆による『球心いまだ掴めず:駒大太田野球 500勝の真実』(日刊スポーツ、06年2月)である。すでに3万部以上売れているとのことだ。

この自叙伝とも言うべき本は、本年1月27日赤坂プリンスホテルのクルスタルルームで催された「太田誠氏勇退 感謝の集い」のさい、お土産とした頂戴したものである。この本(以下『球心』)についてはあとで触れることになる。

ところで、そのパーティーに集った人々は、報道陣も含めて1700名、私がこれまで経験したことのないきわめて盛大なものであった。開会前から原巨人軍監督などにマスコミが群がっていたが、太田監督が育てたプロ・アマでの人材はいうまでもなく、来賓の「フジヤマのトビウオ」古橋廣之進氏や萩本欣ちゃんなど、その交友関係の広さには圧倒される思いだった。特に、リハビリ中の長島茂雄氏が舞台裏に駆けつけたことや、教え子の中畑清氏の徹底した黒子ぶりが印象深かった。

この時点では、私はまだ太田監督と特別に親しいという間柄ではなかった。スポーツ推薦の実技入試のさい入試監督という公務で初めてお目にかかり、多少の挨拶言葉を交わした程度だった。そのときでも、私の高校野球部時代の監督の話など、初対面

にしては実に気さくに接していただいた。と同時に、その「野武士」と言うにふさわしい風貌と直線のように伸びた背筋の姿勢が、強く印象に残った。

神宮最終戦

忘れもしない昨年(平成17年)10月23日、私は小雨ふる神宮球場のバックネット裏にいた。太田監督35年間の最終戦である。この模様は本のなかでは、「それは、冷たい秋雨が降りしきる中でおこなわれた。私にとって駒澤大学野球部最後の試合である」(12ページ)と、淡々だが最終という気分がどことなくただよう叙述で記されている。

この最終戦の当日、実は、大学では大学院の会議が行われていた。私は、「どうしても行かねばならない重要な用件がありますので…」と委員長にお断りをして途中退席した。委員長はどこに行くかは知っていたが、何も言わず許してくれた。あとで先の叙述の箇所を読んだとき、その理由はともかく会議の途中で神宮に駆けつけてよかったとつくづく思った。もっとも、私にとって「重要な用件」であることにウソはなかったのだが。

その最終戦は日大戦で、0-5で負けた。数字にこだわると、このスコアもまた意味ある数字であった。そして、監督在籍501勝の金字塔は、ここに完結した。

二

背番号の意味:「一円相」

私は監督に「なぜ背番号は50ですか？」と聞いてみたい。監督は選手とは次元を異にするから、背番号も選手のそれとは少し違う。だが、なぜ50かは聞いてみたいのである。

そのヒントが『球心』の第1章冒頭にある。「ゼロに始まってゼロに終わる」である。このゼロの意味がきわめて重要だ。太田監督は『『一圓相』という言葉をご存じだろうか。古来、禅僧は筆で一つ丸く円を描く。世の中のものは、すべからず円、すべてが空であることを示しており、禅の悟りを象徴的に表したものと言われる。私は、これを、すべてはゼロから始まってゼロに終わることを表したものだと思っている」(17ページ)と述べられている。

ちなみに宮崎駿監督の「千と千尋の神隠し」の主題歌に、次のような一節がある。「ゼロになるからだが耳を澄ませる、生きている不思議、死んでいく不思議、花も風も街もみんな同じ」(「いつも何度でも」より)。大変気に入っている一節だが、からだが「ゼロになる」と、生きていることも死んでいくことも、みんな円のようにつながって同じに見えてくる、ということだろう。だが、この「ゼロになる」というのがきわめて難しいのである。

私は、この「ゼロに始まってゼロに終わる」という言葉が好きで、手元の本の裏表紙には監督直筆で「一圓相」と書いてもらっている。

球心いまだ掴めず

実は、もうひとつ監督に聞いてみたいことがある。「球心いまだ掴めず」の「球心」である。そのころ、その意味するものは何か、ということである。

バッティングではよく球の芯(シン)をとらえる、ということを使う。芯とは球の中心であるので球心でもある。これぐらいならわかる。だが、むろんもっと深い意味が込められているはずだ。

球を野球(ベースボール)をとらえると、野球の心となる。まさに太田野球の神髄という核心につながってくるが、「いまだ掴めず」と言われるベースボールの心、神髄とは何だろう、このことを思うのである。

私ごとに触れるのは幾分躊躇するが、太田監督を招待し講演も行われた駒澤大学会計人会の第9回総会(7月22日)その懇親会で挨拶をさせられた。そのさい、大学で30年ほどかかわってきた会計学につき、その中心、原点がいまだ掴めないという話しをした。太田監督の「球心いまだ掴めず」になぞらえるには大変おこがましいが、まさに会計の「球心」いまだ掴めず、なのである。

三

野球と数学

小川洋子『博士の愛した数式』という、よく売れた小説がある。博士は数学者だが、大の野球好きである。記憶が途切れている博士は、わけても阪神タイガース江夏の熱烈なファンである。その背番号28にまた大いなる意味がある。「完全数」である。

完全数とは自分自身を除く約数をたすと、これがまた自分自身になるという珍しくも不思議な数である(28 = 1 + 2 + 4 + 7 + 14)。江夏はこういう神秘的な数の背番号をもっていたわけで、小説は「縦縞のユニフォームの肩越しに背番号が見える。完全数、28である」と余韻をもって終わっている。

ところで、村山の背番号は11だが、これは「素数」である。素数とは（自分自身以外）約数をもたない自立した数で、小説ではこの素数も大いなる主役になっている。先に、太田監督を語る1つのキーワードはゼロだと言った。実は、数学史上、ゼロの発見はきわめて大きい。背番号50はゼロと素数の5で成っているのである。

ちなみに、その5は監督の現役時代のサードの番号から来ているものと推察できるが、実は私の野球部時代の背番号も5であった。

野球と文学

野球と文学という点では、日本の野球の功労者があの正岡子規であることはあまり知られていない。子供のころ、毎年のように夏休みは祖父の家のある松山で過ごした。よく通った道後公園内の温泉の跡地に、今はりっぱな子規記念館が建っている。そこに入ると、子規がいかに野球好きであったかよくわかる。「春風や まりを投げたき 草の原」、子規の句である。

実は、この7月21日、太田監督は上野の「正岡子規記念球場」にいた。この新たな愛称になった球場の披露式典に招かれたのである。始球式では子規のお孫さんがピッチャー、監督がバッター、子規時代そのままの2本線の入った野球帽姿の監督がホームベースに立っている（『朝日新聞』7月22日付けの写真）。

監督は、「こういうユニフォームを着ると青年にかえったような気分だ」と言っている。監督はつねづね「気」の重要性に触れられるが、子規が最後まで俳句と食べ物への「気」を見せたように、監督に今なお青年、いやそれ以上の「気」を感じる人は多

いはずだ。

「気」とともに、監督は「自然」を実に大切にされる。野球というスポーツは暑い夏がふさわしいが、監督は夏場に弱い人間はダメだとよく言われる。意味ある言葉だ。ちなみに、私は夏が好きで、なぜか夏に太る。もっともビールが原因かもしれない。ともかくも、クーラーが大嫌いで、自然が大好きな監督だ。「汗をかけ。恥をかけ。失敗を恐れるな」、中畑氏や石毛氏らプロ野球選手をこうして育て上げたのである。

ちなみに、昨年500勝を達成したとき、『朝日新聞』10月14日付けの「ひと」の欄に太田監督が写真入りで登場した。このなかに見落としてはいけない点が触れられている。実績のない選手を一人前にする、という点だ。なかなかできないことだが、こうした思いで育てられた教え子は千人にもなるのである。

凝縮された秩序と美：「姿即心」

ところで俳句の表現形式は5・7・5である（これも素数）。この限られた形式のなかに、何行にもわたって表現する以上の内容、意味合いが表現できる。これが不思議で、また面白いところである。禅の言葉もわずか3文字ほどで表現するように、また同じである。

ちなみに、私が大学で教えている複式簿記も、一見複雑に見える経済活動を借方・貸方のきわめてシンプルな形式（仕訳）のなかで表現する。そこには、俳句と同じような秩序美がある。野球も「数」のスポーツと言われるから、どこかそれに類するものがあるに違いない。

『球心』の表紙カバーの写真は、ややうつむき加減でダッグアウトを去っていく太

田監督の後ろ姿である。その背中「50」が大きく見えるのは私だけだろうか。

そして、この背番号に太田監督の姿と心が凝縮されている。まさに「姿即心」である。

四

出逢いこそ命：「我達人」

『球心』の本のなかに、実はもう1つ好きな言葉がある。「我達人」である。「これは、すべては人と逢うことから始まる。心と心の出逢い、物と物との出逢い、人と物との出逢い、すべて『出逢いこそ命』ということを表しているという。...人と出逢うことを、これほど意識し、そのことを大切にしたら、どのくらい人生が充実するだろうか。私は、この言葉を人生の上でもっとも重く考えて生きてきた」(244 ページ)と述懐されている。

特に、駒澤中興の祖、藤田俊訓先生との出逢いは、監督の人生にとってまことに意味深い「我達人」であった。そのことは第8章に書かれており、圧巻である。こうい

うところを読んでいると、大学が置かれている今日的状況だけに、我が駒澤大学に藤田学監のような人柄と見識と洞察力のあるリーダーが...、とってしまう。

先に、太田監督が顧問になっている駒澤会計人会に触れた。実は、私と駒澤会計人会との出逢いも、また非常に意味深いものであった。とりわけ、会計会の岡林会長、海山・工藤・小林の副会長との出逢いは有り難く、また親しくさせてもらっている。そして、この4人の先生方の間もまた、学生時代の出逢いがその起点になっている。

最後に。私事になるが、会計会総会のさい、招待された早稲田など他大学会計会の役員の先生方に、最近出版した拙著『変わる社会、変わる会計』(日本評論社)を贈呈させていただいた。そのさい、本の裏表紙に記念に何かと言われていたが、私は迷わず「我達人」と書いた。

駒澤会計会、その役員の先生方、そして太田誠監督との「我達人」、その意味をこめて -。

(2006年7月29日)





駒澤会計人会第9回総会にて